

# 二〇一七年度鷹陵史学会シンポジウム パネルディスカッション

司会 貝 英幸

**貝氏** 失礼します。歴史学部の貝です。今回、三人の先生方からお話をいただいたのですが、私は、立場的には藤本先生の立場に一番近いのかな。時代は違いますが、室町時代の古文書などを使って研究をしています。日本の中世史ということであれば一番藤本先生の仕事に近いかなと思います。まず最初に、フロアか



貝英幸先生

らいただいた質問について、それぞれ先生方にお答えをいただくたちを取りたいと思います。そして、先生方それぞれのご報告の内容を深めるということを進めていきたいと思っています。まず、報告の順番でまいります。藤本先生に、卷子装から折本装、ふたたび卷子装という流れで装訂が変化したとありますが、卷子装のほうが状態がよく残りやすいというメリットがあるのでしょうか、もしそうであればどのような理由から残りやすいのでしょうか、という質問があります。

**藤本氏** お答えします。最初に申し上げますように、書物の歴史というのは、紙の発明される前は布です。反物ですね。それに縦書きに書いていたというのが、基本的な形態です。皆さん方のイメージ

として、現在残っているものは、紙を継いで巻物にした物に、九九%軸がついています。卷子に軸をついたままで読んでみますと、後ろからは読めません。本来の実用書として卷子の場合は軸がなく、両端から読めました。しかし、真ん中を讀むためには、大変な苦勞をするため、折本にしていこうというお話をしました。卷子が折本になって讀まれた物が、讀まなくなると、元の卷子に戻されます。そのときには、軸が付いた保存用の卷子になります。卷子は保存用に適しています。それは、重なることにより、空気がふれない状態になります。絵巻物でも外国では額装にしますが、日本ではみんな巻きます。それは表面と裏面がぴったりとくっつきまでするので空気が入らない。そ



藤本孝一先生

のため保存にいいということが第一に挙げられます。第二番目として、軸が付きますと、後ろから読めません。非常に面倒な状態になります。たとえば、金庫が何重にも鍵をかけることにより、面倒になります。それがセキュリティをかけるということです。軸がついて面倒なことをすることによって、保存しようという意思が、そこに生まれてくるわけです。ですから、実用性がなくなつたときに、文化財として、あるいは鑑賞として、お宝として軸をつけて卷子装に元に戻し、保

存・鑑賞のみになります。最初の『明月記』は軸がついていません。次に折本になり、冊子に写されますと、実用性がなくなり、文化財と認識され、軸付きの卷子に装訂され、保存されます。このように、卷子には変化が見られると思います。

**貝氏** そうしましたら次、佐古先生から、藤本先生に対してです。一般に日本の前近代社会、特に公家社会において、先祖の自筆の日記というのは家記として尊重され、その継承が家の継承の証として考えられていたとされています。しかし今回の『明月記』は、家司など多くの手で写されたものが定家の書と後世には考えられていたということになります。このような清書本の作成という点は、例えば『兵範記』なども同様と考えます。すべてが自筆でなくても家記として位置づけられたのかどうか、という質問ですが。

**藤本氏** これは、ニュアンスをはつき

りさせると、中間的なものが消えてしまうのですが、実用書の時は、尊重がありません。『明月記』の場合にも、定家の評価が世の中で決まって以降、あるいは冷泉家の先祖崇拝は、室町以降に崇拝はじまります。例えば、冷泉家では御影（肖像画）というのは当初は作っていません。現在ある冷泉家の御影は江戸時代の画像です。どの時点で尊重されたかは、その家々によって違うと思います。例えば、藤原道長の日記『御堂関白記』にも、折れ線がついています。日記を所蔵する陽明文庫の文庫長名和修さんが、「折れていたよ」と言われたように、実用書として卷子を折本にしていた時期があったのです。その家に残されているわけですから、どの時点で尊重されたか、その家々によって違うとしか言いようがありません。室町以降にだんだん家柄などとともに家祖というものが尊重され、家司等が清書しても家記として残されていく

ものだと思います。最初から尊重されたものではないと思っています。

**貝氏** よろしいですか。次は頼先生に

ですが、まず一つは、基本的な質問で申し訳ありません、なぜ狩猟はそもそも高貴、上品といった位置づけがなされたのでしょうか。また反対に、罽を使用したのは下に位置づけられたのでしょうか。オリジナリティまで改変することですが、この時代において作品を改変することは珍しくないことだったのでしょうか、という質問です。



頼順子先生

**頼氏** お答えいたします。まず、なぜ

狩猟とかそのような高貴な位置づけをするのかということですが、彼らは貴族です。中世社会は身分社会でして、彼らはいろいろなものに序列をつけるということをしていきます。ですから、狩猟する動物に関しても、鹿が最も高貴で、そのあといろいろな動物の序列をつけていく。狼などのような動物は下等な動物であるという位置づけをします。高貴であることの基準になるのは、どれだけ神や天に近いか、あるいは古代の皇帝であるとか、カール大帝であるとか、高貴な人物との関連があるかということです。必ずそれが歴史的に事実かどうかというのはまた別ですが。そして、神に近いということが最も高貴であるとみなされます。ですから、鷹狩りがなぜ高貴であるかといいますと、「鷹が」天に昇っていき、神に近いところにいるから、というような理由づけがなされます。また、罽がなぜ

下々の狩猟だと言われたかといいますと——これはガストン・フェビュスの意見ですが——騎士道的な観点からすれば、飛び道具を用いるのは卑怯であるという考え方があったからです。だから道具を使った狩猟は卑怯な狩猟であって、高貴な狩猟とは、ガストン・フェビュスの場合は犬をけしかけて、ターゲットとなつた動物が疲れるまで追い回して、馬に乗って犬と一緒にずっと追い回して、最後に獲物が疲れ果ててくると向き直るらしいのですが、そこでとどめを刺すやり方のことです。今でしたら動物虐待ですが、そのような狩猟が高貴であるとされていました。馬に乗る、あるいは追いかける、動物と知恵比べするといった基準があります。

次に、作品を、オリジナルなものを変えていくことが中世にあったのかという質問ですが、例えば聖書であるとか、あるいは神学の書とか、権威と見なされ

ているようなものであれば、基本的に変

えるということはいけません。しかし、

ほかの、特に狩猟書というのは、多少権威を帯びたものはあまり改変されていないという事実はあるにせよ、世俗的な書物ですから、改変してもよいのです。と

いいますか、著作権という発想がまだありませんので、写し手がどんどん勝手に変えていくということは、物語などで特

によく見られます。ですから、例えば物語でしたら、その展開や詳細部分が気に入らなければ、写字生が変えてしまつて、そこから異本が出てきたりするわけです。原著者のオリジナリティを尊重するという発想は、基本的にはあまりありません。

**貝氏** また続きまして頼先生にですが、狩猟書以外ではどのようなジャンルの写本が継承されるのか、またその際に残された情報は当時の時代背景とどのような関係を想定できるのか、情報選択の基準として、ということ、これは水田先生

のですか。

**頼氏** きちんとお答えできるかどうかわからないのですが、まずどのようなジャンルが継承されるかということについては、まず一番はやはり聖書であるとか神学であるとか、あるいは哲学などもそうですが、権威がある書物は間違いなく継承されていくと思います。あとは技術書です。狩猟なども技術書ですが、そのような技術の継承はあるかと思っています。

あと、この時代に流行したものではチェスの書があります。チェスも、いろいろな頭を使うゲームなので、たくさん書物が出しましたが、チェスの書は、狩猟の書よりも実は早くに廃れてしまいました。ということ、世俗の書物については宮廷文化の中での流行り廃りというのが残る基準になるかと思います。何がしかの技術、もつと社会に役に立つ技術などであれば、やはり実用という、用を為すからこそ継承されていくということがあるの

ではないかと思います。ですから、時代背景との関係といえますか、その社会でその書物の内容が必要とされているのかという基本的な部分が、継承のポイントになるのではないかという気はしています。よろしいでしょうか。

**貝氏** はい。それからもう一人、頼先生に、星さんからですが、少し長いので読んでいただけますか。

**男性 A** 頼先生と斎藤先生にご質問とどうかたちで書かせていただきました。総合同会を担当させていただいた星です。中世の写本がいかに実用されていたのかについて、読まれて使われていたのか、ということについて非常に勉強になりました。特に狩猟書の事例から本当によく分かりました。私が勉強している範囲では、西洋史の書物の歴史の研究とはやはり版本の読書行為から、という研究のイメージが、シャルティエが行った書物の文化史の版本の研究のイメージが強かつ

た中での写本の研究動向がどうなっているのかという問題もわかつたうえで本当に、大変勉強になったのですが、いわゆる書物の文化史研究と出てきた中での、特に版本がずっと注目された中で、写本に注目していくという写本研究の現実的な意義っていったいどのようなところにあったのか、このあたりは私も理解できていませんので教えていただきたいということが一つ。あと、もう一つですが、狩猟書が版本となっていたときに読まれる層が変わっていくと思いますが、実際にこの狩猟の技法、もしくはそれを受けた取った階層に変化は見られていたのか、実態的にはどうだったのかということ、写本、版本の実践、狩猟のところで歴史的な意義というところからお聞きしたいと思います。

**頼氏** まず、シャルティエの読書の文化史は版本の世界の話ですが、それを写本で行うことの意義についてお答えしま

す。版本というのは基本的には同じ規格というか、同じ仕様ですので内容が問題になります。著者側が発信したものを読者がどう受け止めるかと、そういう話であつたように思います。写本の場合は一点物で、書物文化というべき、財産としての価値のあるような、誰でも作れるわけではないのです。もちろん書物、版本にしたって誰でも手に入れられるわけではないのですが、もう少し読者が広がるということ。写本に関してはまずその書物を持ち、かつ、狩猟書の場合ですと宮廷にアクセスし、王侯貴族が持っているような書物を自分も持つて、そのサークルに入るというところにも、恐らく意味があると思われます。ですから、たんに内容だけではなくて、書物を仕立てる、あるいは持った上で、なおかつ内容を共有するという行為もあると思われる。ということ、版本とは違って、特に誰が読んでどう受容されたかとい

たことで、近世のように大量にデータを取ることがなかなか難しいので、写本の読書の行為について研究を行うというのは、とても難しいのですが、やってみようかなということ、行っています。あと、版本になることによって狩猟法の技法の変化がみられるのかということについては、結論から申し上げますと、実はありません。なぜかといいますと、発表のときにも申し上げたのですが、狩猟というのは、実際に狩猟を行う人間が権利を持つていないとできませんから、〔狩猟人口は〕限られてくるわけです。あと、フランスなどにおいては、狩猟は身分のバリアというか、身分を隔てる手段のようなものとしても機能しています。ですから、情報を伝達する媒体が変わったかといつても、狩猟をやらない人は持たないというのが基本なのかな、と考えています。私ももしかしたら裕福な都市の住人で平民のような人も〔狩猟書を〕読



斎藤英喜先生

むようになるのかもしれないと思って、  
 版本の所持者を探そうとしたのですが、  
 写本だと財産目録に出てくるのに、版本  
 になると価値が下がるので、まとめて

何々以下何冊みたいなかたちで目録に載  
 ってしまったりして、狩猟書というのは  
 聖書などに比べると価値が劣るものであ  
 りますし、なかなか出てきません。よろ  
 しいでしょうか。

**男性 A** ありがとうございます。

**貝氏** はい、ありがとうございます。

そうしましたら今度は斎藤先生への質問

です。大嘗祭は新天皇がホノニニギと一  
 体化する儀礼という見解があります。こ  
 れに基づけば、天皇が一体化するホノニ  
 ニギが杵独王になることは天皇が独一法  
 身イコール大日如来と一体化することに  
 なるかと思えます。一方で、即位灌頂は  
 転輪聖王に倣うものとされますが、そう  
 するところとした天皇の一体化に関する二  
 つの説の関係はどのように考えられるの  
 でしょうか。あるいは、それぞれが記さ  
 れた書物や文脈において、すみ分ける、  
 もしくは競合するということがあるのだ  
 でしょうかという質問です。

**斎藤氏** 即位でホノニニギに一体化す  
 るという考えは、あれはいつからできた  
 のかという問題があつて、『**『積日本紀』**  
 のときに、鎌倉のときにそれがもうあつ  
 たかどうかというのは実はわからない。  
 大日如来と一体化するとか、または転輪  
 王と一体化するというのは、さまざま  
 ものと天皇が一体化するということで、

それはそういう多様な存在と天皇がかか  
 わっていくのだという、まさに中世の問  
 題でもあると思えます。さらに、それは  
 実際に即位灌頂の場合は、摂関家の二条  
 家の流れと、東寺系のお寺のものが入っ  
 て、流派があるようです。そういった流  
 派の競合関係というのがここから出発し  
 ていくのではないかなと思われまふ。そ  
 の中で、今日の『**『積日本紀』**』のような、あ  
 る種神祇官系の卜部氏と摂関家の一条家  
 たちがかかわった『**『積日本紀』**』が次にど  
 う展開していくのかというところの一端  
 が見えたのかなというので、こんなところ  
 でいいでしょうか。

**貝氏** はい。そうしましたら次の質問  
 で、星さん、また読んでいただけますか。

**男性 A** またまた失礼します。斎藤先  
 生にご質問です。今回のご報告の中で、  
 やはり『**『天書』**』が大きな意義を持ってい  
 るということがわかりまして、『**『日本書  
 紀』**』の読み返し、『**『積日本紀』**』それから



伊勢の問題とすると、やはりこの『大和葛城宝山記』だったり両部神道ともがつつりとつないでいく、それは『日本書紀』をまさに読み変えていくものの一つとして『天書』というものの意義があったわけですが、その『天書』をどのようなテキストとして位置づけられていつているのかという、その点に関して何かお考えがあればお聞きしたいということです。

斎藤氏 位置づけというのは、誰によって？

男性 A 『日本書紀』の読み変えの中での、歴史の中においてどのような、ということで。

斎藤氏 研究する側が？

男性 A はい。

斎藤氏 研究する側がどう位置づけるかについて、『天書』の研究ってあまりないみたいですよ。だから僕が見ている中で、明らかに『大和葛城宝山記』と、

ほとんど同文なので、やはりこれをもつと中世神道書として位置づけていくべきではないかなということが、今回は非常に感じました。あまりまだ研究はないみたいです。

貝氏 そうしましたらもう一つ斎藤先生ですが、これは佐古先生ですが、九条家から分流をした時点で一条家が嫡流、二条家は庶流扱いになったために、故実を有しない二条家が即位灌頂を喪失したと理解をされると思いますが、なぜ一家がその起源を、中世神話のかたちをとって古い起源を語る必要があったのでしょうかという質問です。

斎藤氏 その辺は逆に聞きたいところですね(笑)。そこは本当に、今勉強したばかりなので、わからないのですが、

まさに二条家という新しい即位灌頂をやり始めて、先ほど言ったように、二条家の場合だと東寺の側がほとんど中世日本紀というかたちで即位灌頂の由来という

のですか、どんどん作っていきます。その始発点に、『釈日本紀』が何かつながりがあるのではないかなということを今回の発表で述べたのですが、ですからそれは卜部にとって『日本書紀』も即位灌頂とつながりがあるのだからということ、この『釈日本紀』あたりからスタートしていくのではないかなと。そのあとには二条家の人たちが『釈日本紀』なんかをどのように読んでいくのかとか、または『日本書紀』をどのように読んでいたのかということが課題になると思いますが、その辺何かわかったことがあれば教えていただきたいと思ったのですが(笑)、それは今後の課題とさせてください。

貝氏 はい。それではそれぞれの先生方についてはおおよそ以上のようなところですので、お三方の先生方に共通するといえますか、まあ共通しないのですが、そういうかたちで話を進めていき

いと思います。まず藤本先生は『明月記』の伝来で平安後期から現代までの需要というものを述べられました。頼先生の狩猟書は一五世紀以降何のために受容されたのか、もしレジュメで記されている内容に補足がありましたらお聞きをしたいです。同じく斎藤先生の『日本書紀』受容について、近世以降どのように受容されたのか補足がありましたらお聞きしたいという質問があります。

**藤本氏** 私は、皆さんに一番言いたいことは、記録装置としての本なり古文書なりが、今まで伝えられてきたというのは、そこに選択があったということ。どうして残されたのか、どうしてなのか、いろいろな方向から研究がなされています。形態からでも言えると思います。写真の一枚でいいのです。ネットでも写真が出ていますので、それを見ていろいろな形態を考えただけると、皆さん方の論文の補助ともなる論文が書けるのでは

ないでしょうか。さらに形態論からの歴史というもの。残されてきた歴史も歴史学の一分野ではないかと思っています。論文をお書きになるときに、なぜ残されてきたかを踏まえれば、深い論文が書けると思っています。以上です。

**頼氏** 一五世紀以降、狩猟書が何のために受容されたかということですが、私は一四世紀、一五世紀それから一六世紀初頭ぐらいまでは、一四世紀の狩猟文化であるとか、あるいは宮廷文化の名残のようなものがまだ社会的に受容されていて、恐らく実際に受け入れ可能なものとして、少なくとも一五世紀ぐらいまでは狩猟書が再生産されていたのだと思います。結局、一五世紀の後半あたりから、まだはつきりとは申し上げられないのですが、時代が変わっているということです。ただ、写本の文化であるとか、権威に対しては忠実に受容していくという態度が中世にはあります。一応一四世紀の

狩猟書は権威であつたので、今回取り上げた著作に関しては受容されていて、一六世紀になつても、依然として、それらに書かれているものと同じような技法が狩猟の型として残っていたと思います。

しかし、その書き方や、ただのマニユアル書ではなくほかにいろいろな内容が詰め込まれている点が受け入れられなくなっていたのではないかと考えられます。そこで改変が始まって、一六世紀の半ばぐらいになると、一四世紀の権威とされたような書物も、さすがに二〇〇年たつていますから、同じ時代に新しいものが出てくれば、技法そのものは一緒だったとしても、そちらの方が選択されていくということなのだと思います。その後は写本としての価値などに恐らく評価が移っていったのではないかと思います。で、近世、一六世紀の終わりから一七世紀ぐらいいにかけて、役割が変わっていったと考えられます。ただ、一六世紀の終わり



に中世の写本を買った人物がいて、彼が余白に書き込んでるのですが、自分はどこどこでこの本を買って読んだと。ところが自分が仕えている主人が貸してほしいと言って行つてそのまま返してくれなかったと。その後、息子の代になつても返してもらえないのですが、その息子〔孫〕とはいろいろ関係を築いていたので、この際だから譲りますといった内容で締めくくつています。ですから、恐らく読みはしたのだらうと思います。よろしいでしょうか。

貝氏 はい。

斎藤氏 近世の『日本書紀』の継承で、受容の問題ですが、これも先ほど言つた、卜部家の流れで、中世の後期に吉田神道とか吉田家が出てきて、吉田家が『日本書紀』を注釈して、その流れを江戸時代の初期に吉川家の吉川惟足が一応継承していくのですね。ただ、その吉川家のあたりから、まさに近世の儒学の知識がど

んどん入つてきて、その儒学の側に立つていくのが山崎闇斎という垂加神道を作つていく。その垂加神道の中で『日本書紀』は非常に尊重されていく。それが一八世紀に本居宣長が出てきて全部ひっくり返されてしまつて、『古事記』のほうが重要であるといふかたちで『日本書紀』から『古事記』へ転換したという、今一般的にいわれていますが、ただそれも、宣長自身も当然『日本書紀』を相当読み込んでいるわけで、彼の『古事記伝』というのは『日本書紀』の読みを通して『古事記』を読んでもる部分があると思われまふ。さらにこの流れが宣長の弟子の平田篤胤へ続いていて、さらに幕末には篤胤の弟子の鈴木重胤という人物が出てきますが、この鈴木重胤が、宣長の『古事記伝』に対抗して『日本書紀伝』という注釈書を作つて、途中で彼は暗殺されて死んでしまうのですが、そのような経緯で、国学によって『日本書紀』が、

価値がひっくり返ると言われるのですが、実際はかなり『日本書紀』は読まれていますし、新たな近世の学問の中で新しい『日本書紀』の解釈や享受が始まつてくることは間違いないと思います。

貝氏 はい。それでは、今三人の先生方のお話をお伺いしていますと、今回のテーマである継承される史料という場合の、史料の継承というものには、どうも二つの意味を見いだす必要があるのかなと思います。一つは、そもそもその史料自体、記録自体が、記録をされるに沿つた継承、作成の意義がそのまま継承の意義と同一であるような場合。もう一つは、史料の作成の理由とは異なつて、史料自体がそののちに帯びていく価値であるとか、さらに継承する中で新たな価値が見出されるような場合。この二つに分かれるのかなと、お話を聞いていて思いました。この話というのは、藤本先生のお話の中にありました、『拾遺納言定文章案』

の伝来がまさにそれを端的に示していると思います。これは、藤原行成によつて作成をされた定文章案が、これは外部に出た段階では確実に実用的な意味を持つて作られたわけで、行成の子孫に引き継がれていきます。その一方で、恐らくその実用書としての意味を失った『定文章案』というのは、行成が亡くなったあとでそれを手にした藤原忠通が、これは有職の本として収蔵したというよりは三蹟の名品として収蔵しています。ですからここで『拾遺納言定文章案』というのは、自ら及びその子孫が自分の属している貴族社会の中で朝廷の諸行事だとか政務においてその意義を保つための典拠とすべく伝えられたもの。一方の藤原忠通による継承というのは、今のものとは異なつて、あくまでも三蹟の名品としていわば価値のある美術品としての意味から伝えられているという。こういう二つの継承の側面も見いだすことができるのではな

いかなと思います。ですからその意味ではこの二つの継承の在り方というのは、史料の継承の問題を考えようとする場合には区別をして考えるべきかな、と思います。この区分にしたがつてお三方の先生方のお話を見ていきますと、頼先生の報告で取り上げられました一四世紀のフランスにおける狩猟書の需要の問題というのは、まずは一番目の継承、本来の狩猟書というものが帯剣貴族の間で受容されて、それらは貴族の狩猟のマニユアルとして機能したという。だから狩猟の技法という、成立に即したかたちで継承されていく。ところが、やはりそれが途中から逸脱をしていくというところが重要なポイントとして考えられるかと思えます。一方斎藤先生のご報告というのは、主には二番目の継承に関する問題として、とりわけ継承の過程で本来の意義とは異なるような性格が付されて継承されていたと考えることができるかと思えます。

そこで、お三方の先生方にお伺いをしたのですが、この継承というのは、例えば藤本先生の場合ですとあくまでも子孫のためにいうことで作成をされる、あるいは自分のためにいうことですが、その継承というのはやはり一族の内部での継承を中心とし、基本的にはそこから外へ出す意思というのはないものです。

**藤本氏** はい。一番目の意味としては、ありません。外に出すというのは、嫁に行くときに持参する例がありますが、それ以外は、やはり家の中で伝承していったと思います。それが家の没落だとか、時代とともに役目がなくなったときに、改めて周りの方々が価値を認めて、譲られていくことだろうと思います。

**貝氏** 頼先生の場合、ではその狩猟書というものは基本的にはフランスの帯剣貴族という限られた階層の中で本来は継承されるものなのかもしれませんが、お話を聞いている限りでは血縁的なコミュ

ニティにとどまるものではないと理解しています。

**頼氏** むしろ身分という、もう少し広い枠組みで考える必要があるかなと思います。実際は、身分に結びついた権利と狩猟という行為が結びついていますので、家の中というよりはもしかするとある王侯貴族のサークルの中での、何か特別な狩猟のやり方はあるのかもしれませんが、狩猟書そのものは汎用性のあるもので、オープンなものであると私は考えています。

**貝氏** その中で、今度は斎藤先生ですが、斎藤先生の場合は卜部家と一条家というお話があったわけですが、基本的にはこういうコミュニケーションといいますが、貴族社会の中ではそういうものを、新たに考え方を出現してくるような集団というのはどういうものを想定すればいいのかなという、当該期の貴族社会ですとか、階級だとか階層に即したかたちで、斎藤

先生がどのようにお考えかをお聞きしたいと思います。

**斎藤氏** これは、一条家の人たちが伝えてきているもので、同時に卜部の側も伝えていることは間違いないですね。『日本書紀』に関しては、割とこれはかなりの写本があちこちの家にあったことは間違いないのですが、意外なことに『古事記』のほうがほとんどなくなってしまうて、ちょうど卜部兼方のときに、『古事記』という本があるらしいと。ところが上巻と下巻は見つかったのですが中巻がなくなっていました。それで探してみたら、この藤原兼平という、家経と一緒に本を見にいった人物ですが、そこに中巻があった、ということがあって、『古事記』の本が、かなり貴重な本になっていったということが、そのあたりから伺えます。『釈日本紀』の兼文の『古事記』の本を一生懸命探して、見つかったので、一晩で写したなど、そ

のようなことも出ていますので、『古事記』や『日本書紀』、特に『古事記』のほうは非常に一部の人たちの間にしか伝わっていなかったかと。それが分かってきていますので、かなりの限定された集団中で伝わっているのだな、ということが言えるかと思います。だから、『日本書紀』のほうはいくらか『古事記』よりは写本も多いですから、広く伝わっているとは言えるかもしれませんが、やはり流通圏は貴族社会と卜部。あと、伊勢神宮のほうにも伝わってきますので、そういったところに限定されているのかなと思っています。

**貝氏** 今斎藤先生がお話いただいた問題は、実は藤本先生のお話とすごくかわりまして、藤本先生のお話でいきますと、基本的には実用的な性格の書物というの、家の範囲を超えるものではないというのが本来のものです。しかし一方で貴族たちというのは本の貸し借りを

頻繁にしている、斎藤先生のお話にもありましたが、本を写すということをよくやっているわけですが、それはではどのように理解をしていけばいいのかなということです。

**藤本氏** 私の言っているのは、限定された家柄に対する注目の仕方であって、広げる、広がるには、みんなネットワークみたいなのがあって、広がっていくと思います。

**貝氏** そのネットワークで広がっていった段階で、例えば先ほどの斎藤先生のお話ではないのですが、『日本書紀』の新たな理解によって書かれた書物を読んだものが、恐らく卜部と一条家の間で理解をされているような話というのは、恐らく余所の家は持っていないわけですね。

**藤本氏** ですから、なかなか言いにくい、どう表現していいかわからないのですが、用途用途によって広がり方も、百

冊の本があつたら百冊全部違うということです。皆さんが百人いれば全部個性があつて、男であり女であり、老人であり若人であり、みんな違うと思います。本も一冊一冊が違うのです。その本を一つ一つ見て、所蔵する家の個性なり家の歴史なりというものを見極めながら、考察しなくてはいけないということを、言っております。また、体系化の問題として、統一性があります。その本自体も個別に形態・歴史があるとすると、あっちへふらふら、こっちへふらふらとして統一性がないと思われれます。ですから斎藤先生のお考えは、本の、書物の一般的なものというお考えだと思えます。それが正統性だと思えますが、私は個別の本そのものについて考えますので、そこに相当なずれがあるのではないかと思っています。

中で、やはり文献史学、特に文献史学を志している者しますと、研究に用いる文献についての理解というのは、その研究を構成している非常に重要な要素です。ところが、私を例にして言いますと、到底藤本先生のような、史料そのものについての深い洞察といえますか研究の進展というのは、どなたかがされたものを参考にさせていただく程度のことでしかない。だから、研究の進展と史料の理解への深まりというのがイコールにならないのですが、藤本先生の場合はそこが両方、実際史料のほうから研究進めておられますので、当然その進展というのはリンクをしているわけですが、頼先生と斎藤先生それぞれでは、研究と史料の関係とというのはどのようにお考えなのかを最後に、まとめたところでお話をいただきます。ましたらよろしいかと思います。お願いします。

**頼氏** 私は、藤本先生の仰っているこ

とに、実は全面的に賛成でございまして。と申しますのは、私は留学をして、狩猟書をいろいろと——マイクロフィルムで、或いは現物が見られることもあるのですが——史料館あるいは文書館などで見ていたのですが、一九世紀あるいは二〇世紀に校訂されたテキストに書かれた書誌情報を元に追っていつていくうちに、狩猟の書がいくつかの著作と合本をされているという事例が出てきて、非常に悩みました。それは、最初から同じ人物によって、その書物が成立したときに合本されたのか、あるいは後の時代にそれぞれの書物を〔別の〕誰かが合本したのか。いづれにしろ、書物の形態の中で、たくさん合本された中で一つの著作だけを見ていると仕方ないのではないかと。もうすこし、きちんとトータルの史料として合本された書物を見る必要があるのではないかと感じていたのですが、ヨーロッパにも「codicologie」と申しまして、

「写本学」というものがあるのですが、私自身に〔必要とされる〕語学力がないとか、紙や綴じ方などを読み解く能力がなくて、とても残念に思っていたところでした。いつか日本人の方でもそういうことに詳しい方が出てきて、本を出してくれないかなと他力本願なことを考えていますが、やはりヨーロッパにおいてもそのような、モノというか史料の形態そのものを見るということは重要ではないかと私は考えています。

斎藤氏　今のお話の問題は、星さんが質問された、注釈と写本とはどういうつながりか、という質問があったと思いますが、それに関連しているかと思えます。例えば、具体的に言いますと、先ほどの『積日本紀』の編纂にかかわる卜部兼文が、『古事記』を改定して写した。一晩で写したというのですが、そのときに同時に写しながら、メモ的な注をつけています。だから写すときには、同時にもう

注釈をしながら写していたりもしています。ですから本を写して写本を作るということは、既にその時点で注釈が始まっている。つまり、これは分けることができないのだということがあるのかなと思います。ただ僕自身は、本当にそういうものが苦手で、写本の影印しか見ていませんので何も言えませんが、そういう写していく過程が同時に注釈の始まりであるし、伊勢神宮などのほうで『古事記』や、『古語拾遺』を写した、伊勢本の『古語拾遺』というのがありますが、あれは明らかに伊勢神宮の側が自分に都合のいいように『古語拾遺』の本を変えてしまっているということですね。さらに『古事記』も伊勢本の『古事記』が、伊勢神宮では変えているらしい。つまり写本という行為がただ原典のままに写したということとはまずあり得ないのであって、極端に言えば、写している側のある立場や主張が入るし、同時にそこに注釈が入

っていつて、後世になってくるとその注釈の部分が逆に本文に入ってしまうという、そのようなこともよくあります。ですから注釈と写本というのが、刊本ができる前の前近代というか、中世においては同時並行に進んでいるのだなということがわかんと思います。ですから今、貝先生がおっしゃたように、今日シンポジウムでは、継承する史料の中でこの二つの問題を立てて、僕はその後半のほうでお話ししましたが、実はこれは相互に交流し合う問題であって、注釈することと本を写していく作業で、どういう本を作るかという藤本先生がお話しになったことは、決して分離できないのだというところが重要ではないかと、無理やり結論をつけると、そうなるかなと思いました。

**貝氏** もう斎藤先生がまとめていただきましたので、私自体は何もすることがありません。本当ですともう少しお話をしていけばいいのかもしれないが、時

#### 会場（拍手）

間の関係で、以上でパネルディスカッションは終わりたいと思います。つたない司会でどうも申し訳ありませんでした。お三方の先生方にもう一度拍手をお願いします。